

平成 21 年度 スタンフォード大学海外研修 派遣報告書

北海道大学大学院 保健科学研究院 久保直樹

もし現在の業務や環境に不安があるなら、スタンフォード大学の研修を受けると良いであろう。「将来に向かっていく」という格好いい姿勢を見ることが、得るものがきっとあるだろう。もし現在の業務や環境に満足し、向上心があり、腕を磨いているのなら、スタンフォード大学の研修を受けると良いであろう。将来のためにしている研究が理解でき、その成果に目を見張ることになるであろう。

アメリカの放射線診療に携わる技師も、より向上しようと教育や研究を行っていた。特に(教育や研究を行い、それに加えて)今回の研修や講演にご尽力くださった技師の方々には心から深謝したい。また放射線診療に対し患者さんありきという極当たり前のことであるが、そのことをしっかり実現しており、またそれに対するポリシーも講演していた。日本と比べて優劣があるということを超えて非常に正しいことと思われた。

通常、人との接し方では研究者が医療従事者を見習うことになると思われるが、今回の場合ホスト側が研究者であるにも関わらず、医療従事者側が見習うべきではないかと思うぐらい非常に優れた「お持てなし」であった。講義のレベル、最強の講師陣、時間配分、見学など実に細かい気配りを感じた。例え話であるが、極上のワイン(つまり今回の研修内容)を提供されても、それを分かる舌(つまり受講者側のスキルや英語の理解力)がないと無駄になってしまう。自分の理解した範囲でしか感じられないためレベルを低く見積もってしまうような失礼なことが起こり得る。今回幸いなことに参加したメンバーは全員スキルが高く、提供されたものを深く心に刻み込むことができた。受講した我々も幸せであったが、スタンフォード大学側も報われたであろうと想像する。

今回の目標と達成度であるが、Molecular Imaging(MI:分子イメージング)の知見を深めるという目的は十分に達成し、満足できるものであった。生命はタンパク質などの高分子で出来ており、生命のためにそれら高分子がそれぞれの営みを行っている。この働き具合を生体内のどの場所でどの程度行われているか知るためには、MI は最適な方法である。そして疾患が生命の働きの不具合とするのであれば、MI はそれを的確に描出する。まさに次世代の医療を担うものであろう。そして MI における核医学(そして PET)の重要性も再認識された。

今回の研修で得られた成果を今後どのように活かすかにおいて、高等教育施設のあり方について考えさせられた。スタンフォード大学の、人材を集める努力を惜しまないこと、そして世界へ強い影響力を与えていることに強い感銘を受けた。このことが正のスパイラルを起こし、成果そしてまた人が集まることに結びつくのであろう。そしてこれこそ自分たちの内側のためだけということとは違い、社会のための高等教育施設ということであろう。世界に影響を与えるということは是非目標としていきたい。

最後であるが、研究の最先端の地に携わるというチャンスをものにした日本の女性陣(受講者はもちろん当然として、通訳、コーディネータの方々も含めて)の皆さんが非常に素晴らしく魅力的で輝いていたということを付け加えておきたい。

謝 辞

関係者各位に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



Molecular Imaging の雄(ゆう)、Gambhir 先生との記念撮影